

50.6.25

No. 12

博物館報



持 国 天 立 像（佐賀県重要文化財）

この持国天像は、小城郡小城町三間寺円通寺に安置されている佐賀県重要文化財指定の2軸の仏像の中の1軸で、特別の計らいで当館に出品していただいている。円通寺は、臨済宗南禅寺派の禅寺で、鎌倉時代初期に小城晴気荘の地頭となつて下向した千葉氏の菩提寺として広大な伽藍があったが、天保12年（1841）火災にあって焼失したと伝えられている。

この立像は夜叉を踏み、漆箔や彩色、截金の施された寄木造、玉眼嵌入の立像である。現在は、持物及び手首、玉眼等は大部分を欠失し彩色、截金等も剥落し、大部分が素地を現わしており、夜叉も欠失と後補の部分がみられる。本体は像高167厘米で、右手をふり上げ左手は、左にひねった腰にあて、その動きにともなって彫りの深い袂や裾が翻翩としてひるがえり、右足で力強く夜叉の頭を踏みしめ、結髪、開口した忿怒の相で、躍動感に満ちている。この像と対をなす多聞天の胎内に「…永仁2年（1294）大仏師尾張法眼湛幸…」の墨書銘があり、この像は鎌倉時代末期の名工湛幸の壯年時代の作として、仏像彫刻史上価値の高いものである。

持国天立像	1
蒼海、梧竹の書について	2 ~ 5
日本古地図総図展	6
県内博物館案内、大隈記念館	7
博物館日誌、行事紹介	8

第8回研究講座

蒼海・梧竹の書について 一その鑑賞一
講師 佐賀大学教育学部 助教授 土肥慎利先生

10月14日午後2時から博物館中展示室で開催（参加者約200名）された。以下は、その時の講演内容を土肥先生に要約していただいたものである。



講演風景・講師土肥慎利先生

蒼海とは明治の元薦島種臣先生のことである。先生はすぐれた政治家であり、学者であり、詩人であったがまた書が抜群であった。

梧竹とは中林隆経先生のことであり、日下部鳴鶴、巖谷一六と並んで明治の三筆と呼ばれた人である。

この両先生が時を同じうして佐賀に生れられ、その書が明治の書壇だけに止らず、現在もなお全国的に高く評価されていることは郷土人としてまことに喜ばしいことである。

このたび県立博物館主催で大規模な両先生の遺作展が開かれたことはまことに意義深いことである。

両先生の書についてささやかながら述べて見たいと思う。

蒼海先生の書の研究と推移

弘道館時代の書がどんなものであったか資料がないのでわからないが、恐らく父南濠、兄神陽の影響が強かったと思う。南濠の書風は文徵明に近いし、神陽の書風は米芾に近い。先輩の古賀精里の書風は米芾調であるし、草場佩川は董其昌に近く、同輩の江藤新平は米芾や董其昌の風である。だから当時の弘道館の書風はお家流ではなく、店様であったと推察できる。すなわち米芾、文徵明、董其昌、趙子昂あたりの流れを汲む書風であったよ

うである。蒼海先生の十代、二十代の書を見ることができないのは残念であるが、35歳の時、兄神陽の死を横尾氏に知らせる口達があるが、すでに骨格のしっかりした、格の高い書である。30代までに教養として相当の手習いをしていられたことがわかる。40代の書には宋の黄庭堅の風が見える。

蒼海先生の書に一伝機をもたらしたのは清国漫遊である。すなわち明治九年秋から11年秋まで2ヵ年間、清国の文人墨客と交り、多くの名蹟を見、碑法帳に親しむことができたからだと思う。これで先生の書を見る眼が広くなり、また深められ、もっと書を研究しようという動機にもなったと思う。

先生が詩作にふけり、書を学ばれた動機は相次ぐ内親の不幸に遇い、それをまぎらすためでもあったようである。すなわち明治7年、46歳の時、道英、道直の二児を、8年に道堅を、10年に道清を、12年に道守を、13年には愛妻律子さんを失われている。蒼海全集には愛兒、愛妻の死を悼む詩が何首もあるが、展覧という題で、

「桃李研なる時婦未だ帰らず、九原の春色転た衰に堪えたり。平生爾を想いて文墨に耽る。一片の闇情寄せて来らす」など先生のお淋しい気持がひしひしと胸に迫ってくる。

清國から帰られてから特に50代は詩作に耽り、手習いをなさったようである。先生の52、3、4歳代の半紙

書きの草稿百点以上を見たが、まだこのあたりまでは六朝風や、漢、秦、殷周の風は出でていない。王羲之や王献之風の楷書があり、文徵明風があり、米芾風があり、ゆっくりと細い線で抒情的に書いたものがあり、大胆に相当の速さで書いたものがあり、すでに五種類ぐらいの書風に分類できた。その草稿の中に文徵明、王羲之、蘇東坡、懷素、張旭、歐陽詢、岳飛などについて述べたものがあったが、以上には少くとも関心を持てていられたと思う。革新的な性格から、また明治維新という時代も反映して、革新的な人の書に関心を持たれたようである。すなわち宋では蘇東坡、黃庭堅、米芾、張即之、岳飛あたり、唐では張旭、顏真卿、懷素などの勁くて奔放、独創的、革新的なものを好まれたのではないだろうか。

55歳ぐらいから六朝楷書風の作品が出てくるし、篆書や隸書の作品もあるので、この頃からか、或はいくらか前から清国から持ち帰った法帆によって六朝、漢、秦、周、殷と遡って研究されたのではないだろうか。だからこの頃から楷書にも、行・草にも篆書、隸書の気分が入り、また逆に篆書、隸書に楷、行・草の筆意が感じられる。とにかく55歳ぐらいからの書にはいろいろの書体が混じっている。幅の広い研究をされ、また創意を加えられたことがわかる。

60歳代になるとますます六朝、或は秦漢の風気が加わり、重厚さを増し、書格が高まってくる。

70歳代は作品が少ないが、渴筆が多くなり、殆んど統けないで一字一字切って書き、沈着して枯淡味を増していく。

蒼海先生は感受性の非常に強い人で、手習いはあまりしないでも見ただけで理解できた人と思う。唐、宋、元、明、清から遡って六朝、漢、秦、周、殷へと広く研究はされたが、がむしゃらに習いに習った人ではないと思う。またその余暇もなかったであろう。だから身にこびりついた書風、書癖といつものがなく、その時の感覚によって幾様にも変った表現が出来たと思う。蒼海先生の書の出所がわかりにくいのはこのためと思う。

蒼海先生の書の特色

○魂の書

蒼海先生の玄関番をしていた村松某の話として伝えられているのに

「村松さんが手習いをしていると蒼海先生がうしろから見ていられた。驚いて挨拶をすると、何をしているのだと云われる。手習いをしていますと答えると、そんな手習いでは駄目だと云って教えていただいたのが、仮りに村松という字なら、木扁を書く。木扁を書いて村にするんだが、外のこととは全部忘れて、木扁の一一番最初の棒を全心こめて出来るだけ遅く、これより遅くは書けないくらいに遅く書く。今度は綱の棒を同じく氣をこめ

て出来るだけ遅く書く。あとはそれに準じてやる。どんな形が悪くても、少しぐらい丑んでも、それは後の問題だ。出来上がってからのことでの前にそんなことを思うのではない。そうして修業を積んでいれば、曲っても筋の通った書が出来る。」ということを教えてもらつたというのであるが、蒼海先生は一点一画に全身全靈をぶつけていられる。技巧を排していられる。人の書、魂の書ということができる。だから人を引きつけ、感動させる力を持っている。

○謹嚴・嚴肅の書

高島易断の高島吾象は蒼海先生と親しかったが、愛妻に先だたれて淋しがっていられる先生の身を案じ、友人の牧氏と相談して、松島正子さんをとりもつことにきめ、或日蒼海先生を自邸に招じ、正子さんに酌をさせ、機を見て、「あなたは夫人を亡くされて独身ではご不自由でしょう。この座に待べる女性を召して子供さんのお世話をさせたらいかがでしょう。」というと先生は色を正して、「吾輩はまだ妾を持つほど魔敗はない。しかし、折角のお勧めだから彼女を本妻に迎えることに致そう」とといって後日屋敷から子供を呼びよせ、正子さんの下座に坐らせ、「お前たちをわざわざ呼んだのは外ではない。今日、高島、牧氏のご高配でこれなる婦人を妻に迎えることにした。以後母としてよく仕えよ。」と嚴格に言い渡されたと言う。また若い時は道を曲るのに直角に曲っていたらされたという。これはほんの一例だが、この性格が書の上によく現れている。どんなに乱暴に書かれたように見ても各字の中心線はまっすぐに通っている。また綱の線が何本あっても真直である。これで謹嚴さ、厳肅さ、威厳をさえ感じる。

○豪胆でスケールの大きい書

特命全権大使として日清修好通商条約批准のため、北京に赴かれた際、「自分は全権大使として特派されたのであるから、国賓として対等の礼をもって皇帝に謁見すべきであると主張し一步も譲らず、遂に清国を屈服させたあたりなかなか豪胆であり、痛快である。またベルーフ船マリア、ルーズ号の奴隸解放問題にしても、閣内には国際問題となることを恐れて反対の立場をとる人も多かったが、蒼海先生は人道上から困難と知りつつもあえて解放に努力することにふみ切られた。そして成功された。肝っ玉が大きくなくては出来ないことである。征韓論に破れると直ちに職を辞し、日本にいては何も出来ぬと清国漫遊の途に上られたあたりなかなかスケールの大きい人である。この性格が書に出て例えば伊万里市役所の「宏濟閣」高伝寺の「曹溪」楊柳亭の「大蔵」の額など実に豪胆でスケールの大きい書である。

○革新的な書

蒼海先生は保守的な藩の制度の変革を考えたり、討幕運動に奔走したり、幕府に大政奉還を説く為に脱藩したり、民選議院設立の建白書を出すなど革新的であった。それで50代あたりまでは書道革新家の書、すなわち唐では顏真卿、張旭あたり、宋では黄庭堅などを好まれたらしくその影響が強いようである。また勤王の精神に徹していられたので殊に顔真卿、岳飛の書を好みたようである。先生は古典を学んでもその型にとらわれず、自分の書を書き、常に新しい試みをしていられる。作品の取め方にも新しい試みをされているので今見ても新鮮である。明治時代を超えて極めて革新的な書を書かれたといえる。

○多様な落款

落款というのは書を書き終って自分の名前や号などを書き入れ、それに印を押すことであるが、普通は何某書と書いてそれに印を押すのが殆んどである。蒼海先生のは一定せず実に多様である。二玄社の「副島種臣書」で調べて見たら、

副島種臣書46 種臣書17 一々学入副島種臣書10 一々学入種臣書6 蒼海副島種臣書4 一々学入書3 副種臣書、日本後学副島種臣書、日本副島種臣書、一々学入菅原種書が各1となっている。

副島種臣書が断然多く、蒼海書、一々学入書と号だけのものは殆んどない。これは号を書かないで姓名を書くという謹誠眞面目な先生の性格があらわれと思う。印は印矩を使用して押されたらしく、少しもゆがまずびしやりと取っている。また落款の書体、書風が多様であることに驚かれる。いかに独創的であったかがわかる。このように多様な落款を入れた人は他に類を見ない。

梧竹先生の書の研究と推移

梧竹先生は10歳までは小城藩水町空齊に学ばれたと伝えられているが、空齊の書がどんなものであったかわかららない。空齊は先生10歳の時86歳で歿している。

先生は4歳の時筆を執って神童と称せられ、10歳の時村社の額を書いて藩主に認められたというから、少年時代から抜群であったろう。

漢籍を草場鷗川に学ばれた。鷗川は多くの出で江戸に遊學し、全国に名を馳せた学者で吉田松陰、僧月照も学んだと伝えられている。書画もよくされたので空齊の死後に鷗川の影響が大きいと思う。

14歳の時から江戸に遊學し、18歳の時、山内香雪に入門、漢籍と書を学ぶことになった。山内香雪は名高い儒学者でまた能書家であった。先生はこの香雪を非常に尊敬さ

れ、生前に東京芝、薬王寺の山内香雪の墓石に相対して墓を營まれている。ここには先生の分骨が収められている。香雪は先生の書の技術をみとめ、その師市川米庵に先生を紹介した。市川米庵は宋の三大家の一人、米芾の書風をよくし、当時巻菱湖と並んで我が最も書名が高かった。加賀の前田侯に仕え、四百石の禄をはみ、なかなか権勢のあった人である。米庵は安政5年、梧竹先生32歳の時に80歳で歿している。米庵歿後はその高弟川上化堂に師事されたとある。山内香雪も先生34歳の時に62歳で歿している。

幕末から明治維新にかけて世は騒然となり、世相の変化が相次ぎ、梧竹先生42歳の時に明治維新を迎えた。明治4年、先生45歳の時に庵藩置県となり、先生は帰郷され、小城町新小路の原口氏の旧宅に同居し書道に専念された。

これよりさき41歳の時に長崎に遊び、清国人林雲達に書法を問い合わせ、これより中国書道に目を向けるようになられた。林雲達は先生の書道研究の非凡を見ぬき、惜しみなく指導援助を与えたという。

明治11年林雲達の後任として、清国長崎領事の初代正理事として余元眉が赴任した。余元眉は当時中国第一流の書家潘存の弟子で、明治13年清国公使顧問として来朝した楊守敬と兄弟弟子である。この楊守敬は日下部鳴鶴、巖谷一六、松田雪柯に六朝書道を教え、明治の書道を一変させる原動力となった人である。梧竹先生はこの楊守敬の来朝よりも早く、余元眉から六朝書道を伝えられ、多数の碑版法帖の提供を受けて中国書道の勉強をはじめられた。梧竹先生は余元眉のすすめで上海から上質の純羊毫筆を取り寄せてもらわれるから、我国で純羊毫使用のはじめであろう。梧竹先生はしばしば長崎に足を運び、また長崎に住み、清国に渡る前一年半位は聖福寺にお世話をなられた。聖福寺の善光和尚は先生の書才と人物を認め、衣食住一切の面倒を見られたという。

明治15年8月、先生56歳の時、余元眉の一時帰國に伴われて清国に渡られた。そして余元眉のすすめで、潘存に師事することになった。潘存は余元眉の師であり、人格高潔で金石学に精しく、書学者として一世を風靡した人である。平常弟子をとらず、また書の求めにも応じないという人であったので、李鴻章の紹介で弟子にしてもらったという。先生は潘存の門に留ること2年、金石学と漢魏六朝から、腹間にわたり広く書法を学ばれた。また廻腕法といって5本の指先で筆を持ち、筆を垂直にして眼の前で書く法と、鋒先の長いわらかい筆の使い方と、立って机の横から書く方法を受けられた。

先生は在清中各地を廻り、法帖類を集め、また文人墨客と交り、眼を肥やし、技術を練磨された。

明治17年58歳の時清国から帰られ、小城に留まられた。時折長崎に出かけて余元眉と親交を温められた。余元眉はこの年の12月に本国に帰っている。

梧竹先生が清国から帰られたと聞いて、副島種臣伯爵や松田正久男爵、波多野敬直子爵など郷土出身の友人が相談して、東京銀座の伊勢幸主人青木竹子さんに梧竹先生の世話を依頼した。竹子さんは主人幸兵衛の死後、姪のこうさん、いくさんと数人の職人で婦人子供服店を経営していられた。竹子さんは義理堅い人でまた太っ腹の人でもあったので、梧竹先生の世話を心よく引き受けられた。時に明治17年、先生58歳の夏であった。竹子さんは先生の世話を引き受けられて以来、30余年間、こうさん、いくさんと共に実に実父に仕えるように衣食住から、書の研究に要する費用一切の面倒を見られた。世事にうとく、経済観念も乏しい先生が生活上何の苦勞もなく、書に専念出来たのは全く竹子さんの献身的な奉仕によるものである。竹子さんは昭和14年84歳で歿し、こうさんは大正2年39歳で歿し、またいくさんは昨年83歳で歿せられた。

○学書の態度

梧竹堂書話に

「書家は鍊筆あるを知りて鍊心あるを知らず、蓋し点画の工は鍊筆に生じ、しかして風品の高きは鍊心に生ず。」とあるが先生は技よりもむしろ書の品位に目標を置いて鍊心に心掛けられた。親音様を非常に信仰され、毎朝朝覲音経一巻をよむことを日課とされたという。また永平寺の森田信由禪師、円覚寺の北川洪川禪師などに道を聞かれ、また多くの道書を読んで悟道につとめられた。また「退筆山の如きも未だ珍とするに足らず、読書万巻始めて神に通ず」という蘇東坡の言を引用していられるが、梧竹堂書話を読んでも古来の多くの書論を読み、多くの漢書を読破していられることがわかる。また「書家に忌む所は慾なり。慾の躬に在る。なお塵の氷にあるがごときなり。人の神明を昏昧ならしむ。」とあるが先生はほんとに慾がなかった。物慾は全くなく、謝礼をもらってそのまま籠にはうり込んで物を買う時は包のまま出されたという。大金を積んでいやと思ったら書かれないと、ボタモチお重一杯で沢山書いてもらつた人もあるといふ。書仙と呼ばれるゆえんである。

梧竹堂書話に「筆意を漠槐に取り、筆法を隋唐に取り、これに帶ぶるに晋人の品致をもってし、これに加うるに日本武士の気象をもってす。これが家の書則なり。」とあるが各長所を取り、中国人の物真似ではなく、日本人の書を書こうとした先生の意気込みがうかがわれる。まだ「古人を奴する者は少く、古人に奴せらるるものは多し。能く古人を奴するに至っては則ち書もまた不朽の盛事なり。」ともある。先生には古人を奴するという概があった。また「書を学ぶ者は清より明、明より元、元より宋、乃至は漢、秦、周、その流れに遡りてその源を究め、歴代を串穿し、百家を總録し、鍛錬鉗錠して、腐

臭を化して新奇となし、一家の生面を開き、百代の新風を創む。それかくの如くにして書道の能事は終る。」とあります、自分の書を完成するに止まらず、その時代だけでなく後世までも生命を失わない新風を創り出すべきだとしていられる。この意気込みがあななからこそ當時並んで三筆といわれた日下部鳴鶴、巖谷一六、を凌いで今もなお生命があり、梧竹芸術は燐然と輝いている。

また梧竹堂書話に「張芝は池に臨んで池水尽く黒く、智永は戸を閉じて敗筆瓮に満つ……。」というのがあるが故事が多いので要約すると、後漢の張芝という草書の名人は芭蕉の葉に練習し、池の水で洗っていたので池が真黒になった。隋の智永は戸を閉じて二階に上りきりで30余年間、真草千字文八百本を書くのに努力し、使い古るしの筆が一斗を入れる瓮に五杯になった。項羽は書を学んで成らず、劍を学んでも成らず、遂に兵法を学んだ。このように学んで成らなかつた人もあるが、学ばないでうまくなつた王羲之や王献之ではない。努力を要するゆえんである。千匹の兎から作った大筆を使い古るしてしまうようでなければ一家の書をなすことは出来ないこういうことである。先生は一日に五合の墨液を使われたというがこの一事で如何に努力されたかがわかる。先生は銀座の伊勢幸の二階で中国から持ち帰った古典の研究に没頭された。古典の研究は一生廢されなかつた。一つの型が出来上るとまた新しい試みをなされた。長鋒から短鋒、超短鋒と筆をかえられたのも型をこわす一つの手段であったと思う。だから先生の書は若々しかつた。常に新しかつた。進歩して止まなかつた。梧竹芸術の最高峰は85歳以後であると言つても過言でない。小城高校渡辺氏蔵の唐津高取氏宛の手紙は死の三日前のものであるがすばらしい芸術作品である。千代雀の横物や妙觀院の「金剛輪堂」の額は死の何日か前に87歳の老翁が書かれたとは思えないほど堂々たるものである。先生の書の特色を述べるには紙数が尽きてしまつたがこの生涯を通して書が若々しかつた、進歩して止まなかつたというのが一つの大好きな特色である。

○蒼海・梧竹の書に学ぶもの

戦後展覧会がしきりに開かれ、いわゆる会場芸術として読むためよりは見るための書に変わった。そして人間不在の技巧だけの書というそしりもなきにしもあらずである。ここで「書は心画なり」とか「心正しからざれば筆正しからず」とかの古人の言が蘇ってくる。抜けだけでは人を感動させるような書は出来ない。蒼海・梧竹の書は心技一体の書である。だから人の魂をゆり動かすような力を持っている。「蒼海・梧竹に續け」というのが現書壇への警鐘ではあるまい。

県立図書館新館建設10周年記念

日本古地図絵図展

主催 佐賀県立図書館
佐賀県立博物館

会場 佐賀県立博物館

会期 昭和48年1月25日～2月13日
(1月29日・2月5日・12日は休館)

「展示の概要」

県立図書館には鍋島藩政資料、ならびに明治行政資料の中に古地図、古絵図類約1000点がある。この中で一般に興味深く、学術的に価値高いもの 230点と県立博物館所蔵の絵図10点ばかりを展示する。

鍋島藩は江戸時代をつうじ長崎防備などを担当し、明治維新にも多くの人材を輩出した華藩である。この鍋島藩が300年間にわたって収集、作製した古絵地図を一堂に展示するもので、本邦初公開であるばかりでなく、日本近代史のカギを解く貴重な展覧会になる。

展示内容、世界図、日本総図、国図、町図、合戦図、道中図など。



長崎港鳥瞰図の部分

「薩摩見取図」のうち・桜島造船所



県内博物館案内 その5
大隈記念館



正面全景

◎場所 佐賀市水ヶ江町2丁目11番11号

電話、佐賀3局・2891

◎管理 大隈記念館保存会

◎所有 佐賀市

◎入館料大人20円・小人10円

(団体、大人10円・小人5円)

◎開館時間

午前9時から、午後5時まで

◎休館日

○日曜日

○国民の祝日の翌日

○年末(12月28日～31日まで)

○年始(1月1日～3日まで)

◎敷地、建物

国道34号線の片田江交叉点から、南へ下って、四つ目的小路を会所小路という。この小路の中程の位置に記念



2階、展示室の一部

館があつて、大隈重信旧宅と隣接している。このあたりには今日でも、古い佐賀城下武家屋敷のたたずまいが残つておる、ヤダケの垣根などもみることができる。

敷地、2055平方米(市有)

建物、320平方米(鉄筋コンクリート2階建)

記念館の西にある、大隈重信旧宅は、昭和40年6月4日、史跡に指定されたもので、財団法人、大隈重信誕生地記念会が管理にあたっており、一般希望者の参觀にも供している。

●建設された経緯

大藏卿、外務大臣(2回)、総理大臣(2回)を歴任し、明治、大正時代、政治家として、その名を天下に知られた重信は、生前かねがね125才までは生きると申されていた。そこで、重信の誕生125年を記念して、昭和38年9月に発起人会、同年10月建設委員会発足。全国に建設資金の募金をよびかけ、昭和41年2月、3500万円の基金をもって着工。同年11月完成。昭和42年10月、佐賀市に寄贈されて開館したもの。

設計は早稲田大学名譽教授、今井兼次氏である。

●展示物、常時約130点を展示している。

●重信関係図書

書、重信の書、書翰、重信夫妻の御装束、笏、硯、香炉、花生などの調度品。胸像(1919、イタリヤ、オテイリオ、ペシイ作)

●大隈久満子

氏が大正15年に寄贈した図書約100冊(重信が使用したものも含まれている。)

●応接室には重信、綾子夫妻と三井子母堂の三人が並んで、画像額があげられている。



重信、綾子夫妻、三井子母堂の肖像

(手塚静雄)

博物館日誌

10月20日	「蒼海・梧竹展」展示品一部入れ替え	11月14日	アンソール展一般公開
11月1日	NHK総合テレビ「話題の窓」で「蒼海・梧竹の書」放映	11月18日	第22回県展開場
11月3日	武雄市市民集会所で「佐賀県立博物館移動展」開催	11月20日	金沢文庫長酒井敬一氏来館
11月5日	武雄市「移動展」終了(総観覧者 3,527名)	11月23日	大門跡展開場(佐賀玉屋)
11月7日	「蒼海・梧竹展」終了(総観覧者数 5,985名)	11月26日	第22回県展終了(総観覧者数14,939名)
11月10日	有明町公民館で「佐賀県立博物館移動展」開催	11月28日	大門跡展終了(総観覧者数 9,400名)
11月11日	博物館協議会開催(応接室)	12月2日	教育資料展開場
11月12日	有明町「移動展」終了(総観覧者数 2,123名)	12月3日	ベルギー、アントワープ王立美術館々長ワルター・バンベセラーレ夫妻来館
11月13日	アンソール展開場式出席のためベルギー大阪総領事、ベルギー王立美術館美術部長他来館	12月5日	アンソール展終了(総観覧者数 39,358名)
		12月7日	佐賀県高等学校美術展開場
		12月10日	文部省社会教育局今村武俊氏「教育資料展」観覧のため来館 鳥栖市佐藤儀三教育長他14名当館の施設見学 佐賀県高等学校美術展終了(総観覧者数 543名)

行事お知らせ

事業名	月日	曜	時間	内 容
佐賀県立図書館 新館建設10周年記念	1・25 ▼ 2・13	木 ▼ 火	9.00 16.30	県立図書館が所蔵する世界図を初め、日本国図、蝦夷地から沖縄まで日本各地の古絵図の集成である。肥前の国絵図を中心とするが、鍋島藩が、肥前のみでなく、日本全土に眼を向け、収集した貴重な資料として注目されている 240点余を展示する。
日本古地図絵図展	2・14 ▼ 2・19	水 月		展示物入れかえのため
休館				
常設展 郷土の歴史と文化展	2・20 ▼ 3・31	火 土	9.00 16.30	佐賀県の地質時代から現代までの自然史資料や考古・歴史・美術工芸の資料を系統的に展示して本県の歴史と文化の特質の理解に資する。

佐賀県立博物館移動展を終わって

当館では、博物館利用の機会に恵まれない地域の人々のため移動博物館を実施しているが、今年度は11月2日から4日まで武雄市市民集会所で、11月10日から12日まで有明町公民館に於いて開催した。

展示品は、当館に所蔵している先史器、織文、弥生、古墳時代の石器、刀剣、装飾品など 130点の考古資料と、武雄市では同市所有の潮見古墳出土の馬鐸、鉄製大刀、金冠、金鏡等50点を同時に展示し、また有明町では上記の考古資料の他、精煉方図等の絵図、古賀精里、江藤新平の書などの歴史資料も展示了。

両会場とも本下之治賀文化財調査監を講師として「武雄市の古代」、「古代有明町の文化」についての講演、有明町では、同町教職員に対し「杵島山の古代」についての特別講演を行ない好評を博した。



武雄会場風景

博物館報	第 12 号
発行年月日	昭和 48 年 1 月 1 日
編 集	古賀 秀男
発 行	佐賀市城内一丁目15-23 佐賀県立博物館
印 刷	佐賀印刷社